

因尾谷の野梅と

牧野富太郎先生

本匠 久々宮 永

植物学者の牧野富太郎博士が、戦時中に因尾谷の野梅の調査に見えられたことは、話に聞いて知っていました。村にただ一人の医師であり、文化人である高野院長先生が、牧野博士をリヤカーに乗せて、引いて歩かれたとも伝えられています。

しかし、それが正確にはいつの事であったか、どんな経緯からそうなったのか、一向つまびらかではありませんでした。ところがこの程、計らずも牧野先生の著書「植物記」を読む機会に接し、始めてその間の事情を知ることができました。

『植物記』は、戦時下の昭和十七年に、桜井書房より刊行された本で、随筆風に、しかも専門的な事をも読み易く書かれています。そしてその一項に「豊後に梅の野生地を訪う」が収められてありました。以下その書き

出しの一部を引用します。

九州の豊後に梅の野生地があると聞き、是非一度はそれの実地見物を致したいと思っていた。然し何分にも東京よりは遠い九州の事であるので、思うに委せずこれまで希望が達せられなかった。

ところが今回、かねてあこがれていた梅の野生地を実地に見る事を得て、始めてその情況が判明し、年来の切望を果たすことが出来た。

私は昭和十五年十月十八日東京を立ち、かねて招かれていた広島文理科大学へ、学生の実地指導と講義とに出かけた。それがすむと、同月三十一日宇品港から出航して、翌日十一月一日早暁、豊後の大分港に上陸した。

同地では大分県教育会が主となり、同国の臼杵町、佐伯町を中心として、四日間植物採集会が催されたのである。(中略)四日の内、十一月三日に梅の野生をウイジットすべく赴いた。即ちその目的地は、豊後国南海部郡因尾村の地内であって、そこは佐伯町からやや南よりの西方七里程も奥の地点で、井の内容谷と言う処である。

因尾に至るまでの案内には、当時大分県史蹟名勝天然記念物調査会委員の山本義光氏があたられ、因尾谷に入ってから、前述の高野忠医師が案内役をなされたものようです。

井ノ内容谷は、番匠川源流の一つで、酒利岳に源を發し、長楽寺跡の葉師庵のある部落を流れている谷のことです。『植物記』には次のように書かれてあります。

ここは左右は山で、一条の溪流が山間の奥から流れ出て、入口の道には農家が点在しているが、奥に至るに従い人家はなくなる。その奥の方から溪流の兩岸に沿い梅樹が断続して野生している。その数は頗る多い。そして古木もあれば若木もある。

当時、井ノ内容に限らず、番匠川上流地帯、俗にいう因尾谷には沿道至る所、梅の野生樹は見られました。それが、昭和十八年秋の大水害によって、潰滅的な状態となり、僅かに支流の小谷に、何本か難を免れたものが残っていた位でありました。

しかし、それから四十年近い歲月は、溪流を流れて来た梅の落実は子苗となり、若木となりして、沿岸に再び野生梅の木が、見られるようになった事は嬉しい限りです。

梅が帰化植物の一つである事は定説です。

この梅は支那と同様に、日本にも天然に野生していたか否か。私のひそかに考える処では、元来梅は日本の固有種ではないと断じたい。

九州は太古、大陸から人種が入り込んだ地であるから、その人らにより持ち来され、それが元となり繁殖し、今日ではその人種はそこに居なくとも、梅は依然として葉落ち花開き、連綿その生を続けているものであろう。

見渡す処、非常に古い老樹は見当らないが、これは元来梅は、杉や楠などのように永生きを遂げる木では

ないので、その間、新陳代謝し、従って今日では古代の木は認められぬのである。

とあります。

梅は三四十年もたつと古木の趣きを呈するものであります。昭和十八年災害の跡の谷間にも、また梅の野生樹が育ちつつあります。然るに近年その育ちつつある野梅を、盗掘する心ない輩が後を断ちません。

自然の物は、それがあがままの姿であってこそ美しいのではないでしょうか。何等かの保護対策が講ぜられねばならぬ時期が来ているように思います。『植物記』には上記の他、梅の野生地は切畑村の堤内、上堅田の大越、下堅田の石打にもあると記されてあります。こうした各地の野生梅を、自然のままの姿で残したいものでもあります。

終りにこの『植物記』の所持者である森山正義氏について一言付記しましょう。氏は福岡県大野城市在住の方で、昨年秋この『植物記』を入手され、井ノ内谷を訪ねた衝動にかられ、この程井ノ内谷を訪ねて来られました。頂いた名刺の肩書によると、九州生薬研究所免疫学グループとなっています。探訪の今一つの目的は、カワラ

茸の採集にあったようです。カワラ茸は、椎茸栽培をしている人なら誰でも知っているごく有りふれた雑菌ですが、その薬効を研究しているとのこと。もしそれ成功され、大量に必要となり、人工栽培するようになつたら、農山村の新しい産業ともなりうるであります。氏の成功を祈り、短い滞在期間に一夜『植物記』を貸して頂いた事を謝す次第であります。

牧野先生見えましより四十年野生の梅は溪に育ちつ

(終)

(75頁の続き)

昭和49・10・18 佐藤大庄屋跡の調査

佐藤大庄屋の歴代の業績は特集号を発行しているので省略す。

昭和50・3・5 下直見水口地区の文化財調査

大庄屋々敷跡、歴代大庄屋墓碑、今後調査研究を必要とする。広大な芝原探題屋敷跡と探題の墓石と思われる石碑、これには次のとおりの銘記がある。

慶長六辛丑年

法名釈道樹乘原根元

十一月二十二日

文化五戊辰年俗名曾宮喜左エ門

(つづく)